

Ⅲ 調査結果の概要

□ 暮らしや生き方について

問7 結婚観、家庭観に関する意識について…P19参照

① **結婚するかしないかは個人の自由である。**

- ・ 「結婚するかしないかは、個人の自由である」に同感する方が80%を超えた。

結婚についての考え方については、「結婚するかしないかは個人の自由である」に「同感する」「どちらかといえば同感する」の割合が86.6%と最も高くなっている。

年代別で見ると、「同感する」「どちらかといえば同感する」の割合は、年代が若いほど高くなっているが、20歳代では30～40歳代より低くなっている。

国と比較すると、「同感する」「どちらかといえば同感する」の割合は小樽市の方が高くなっている。

② **「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」だと思う。**

- ・ 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」に同感しない方の割合が高い。

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という固定的性別役割分担意識については、「同感しない」「どちらかといえば同感しない」の割合が38.3%で、「同感する」「どちらかといえば同感する」の20.5%を上回っている。

年代別で見ると、「同感しない」「どちらかといえば同感しない」の割合は、年代が若いほど高い傾向となっている。

前回調査と比較すると、「同感する」「どちらかといえば同感する」の割合が減少し、「同感しない」「どちらかといえば同感しない」が増加しており、固定的性別役割分担意識は10年間で少しずつ薄れてきている。

北海道、国と比較すると、「同感しない」「どちらかといえば同感しない」の割合が「同感する」「どちらかといえば同感する」を上回っており、同じ傾向となっている。

③ **結婚しても、必ずしも子どもを持つ必要はない。**

- ・ 「結婚しても、必ずしも子どもを持つ必要はない」に同感する方の割合が高い。

「結婚しても、必ずしも子どもを持つ必要はない」という考え方については、「同感する」「どちらかといえば同感する」の割合が32.7%で、「同感しない」「どちらかといえば同感しない」の22.2%を上回っている。

年代別で見ると、「同感する」「どちらかといえば同感する」の割合は年代が若いほど高くなっている。

国と比較すると、国では「同感しない」「どちらかといえば同感しない」の割合が、「同感する」「どちらかといえば同感する」を上回り、小樽市とは逆の傾向となっている。

④ 結婚しても相手に満足できないときは離婚すればよい。

- ・ 「結婚しても相手に満足できないときは離婚すればよい」に同感する方の割合が高い。

「結婚しても相手に満足できないときは離婚すればよい」という考え方については、「同感する」「どちらかといえば同感する」の割合が33.3%で、「同感しない」「どちらかといえば同感しない」の25.3%を上回っている。

国と比較すると、「同感する」「どちらかといえば同感する」の割合が「同感しない」「どちらかといえば同感しない」を上回っており、同じ傾向となっている。

- * いずれの質問においても、「結婚はすべき」「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」「結婚したら子どもを持つべき」「離婚はすべきではない」という固定観念は男性の方が女性より強い傾向となっている。

問8 家庭内での家事分担について…P31参照

- ・ 10項目中、7項目の家事は「妻が中心」で、「夫が中心」なのは除雪のみ

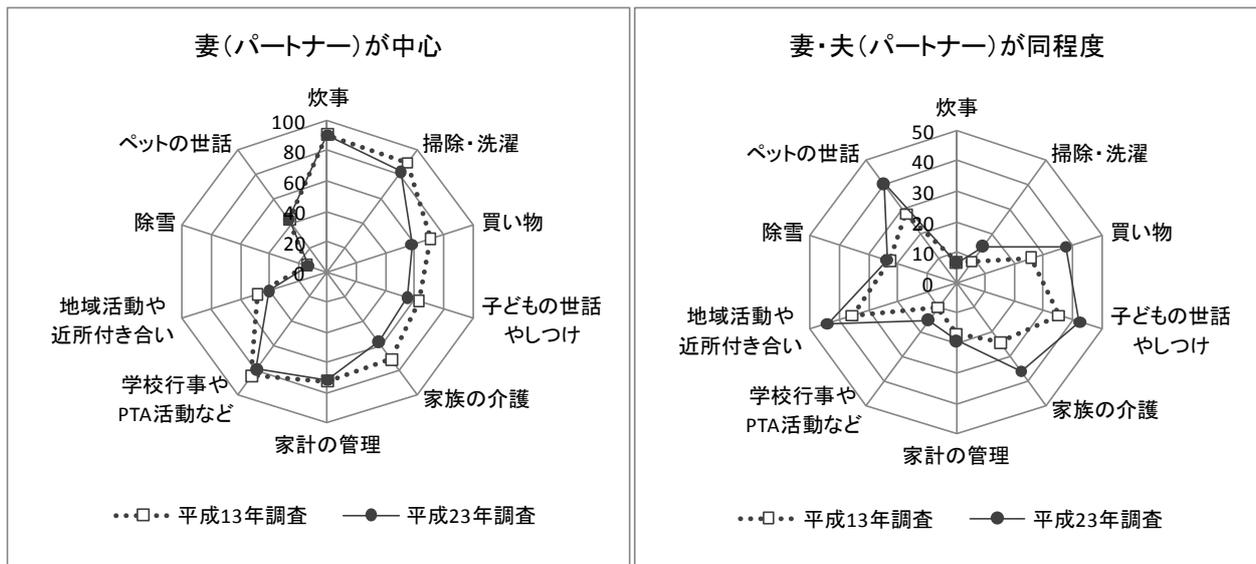
「炊事」など10項目の家事分担については、「夫が中心」に行っているのは「除雪」のみで、「地域活動や近所付き合い」「ペットの世話」を除く7項目は、「妻が中心」の割合が高くなっている。

性別で見ると、「妻・夫が同程度」の割合は、ほとんどの項目で男性が女性を上回っており、男性が同じ程度に分担していると思っても、女性はそうは思っていないという男女の意識の違いが見られる。

前回調査と比較すると、「ペットの世話」を除く9項目で「妻が中心」の割合が減少し、特に「買い物」「家族の介護」では約13～15ポイント減少はしているものの、「炊事」「掃除・洗濯」「家計の管理」「学校行事やPTA活動など」の4項目では、いまだ「妻が中心」が70%を超えている。また、「妻・夫が同程度」は「炊事」を除く9項目で増加し、特に「買い物」「家族の介護」で増加しており、男性の参加が増えてきている。

- * 家庭内での家事への男性の参加は、前回よりも増えてきているものの、日常的な家事(炊事、掃除、洗濯など)への参加はまだまだ進んでいないことが分かる。問14で「男性が家事などに参加するために必要なこと」としての回答のとおり、労働時間短縮などで余暇時間を持てるようにしたり、男性の家事参加について啓発をするとともに、研修による男性の家事技能を高めていくことが求められている。

単位 (%)



問9 子育ての考え方について…P52参照

① 女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく育てた方がよい。

- ・ 半数以上の人子どもに「女(男)らしさ」を望んでいる。

「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく育てた方がよい」という考え方については、「同感する」「どちらかといえば同感する」の割合が60.0%で、「同感しない」「どちらかといえば同感しない」の11.9%を大きく上回っている。

性別で見ると、「同感する」「どちらかといえば同感する」の割合は男性の方が高くなっている。

② 3歳くらいまでは母親が育てた方がよい。

- ・ 約42%の人が「3歳くらいまでは母親が育てた方がよい」と考えている。

「3歳くらいまでは母親が育てた方がよい」という考え方については、「同感する」「どちらかといえば同感する」の割合が41.8%で、「同感しない」「どちらかといえば同感しない」の19.2%を上回っている。

性別で見ると、「同感する」「どちらかといえば同感する」の割合は女性の方が高くなっており、女性の方が母親による子育てについて肯定的となっている。

年代別で見ると、「同感する」「どちらかといえば同感する」の割合は30歳代だけは極端に低く、年代が上がるにつれて高くなる傾向となっている。30歳代は共働きの割合が最も高く、実際に子育てをしている中で母親だけでの子育ては難しいという現状や、近年、育児に関わる若い男性が増えているためと思われる。

③ 家事の手伝いは男女平等にさせる方がよい。

- ・ 約71%の人が「家事の手伝いは男女平等にさせる方がよい」と考えている。

「家事の手伝いは男女平等にさせる方がよい」という考え方については、「同感する」「どちらかといえば同感する」の割合が70.6%と最も高くなっている。

性別で見ると、「同感する」「どちらかといえば同感する」の割合は女性の方が高くなっている。

問10 自分の世話を誰に見てもらいたいのか…P58参照

- ・ 「家族に見てもらいたい」派と「社会に見てもらいたい」派がほぼ同じ割合

自分の世話を誰に見てもらいたいのかについては、「家族に見てもらう」「主に家族に見てもらい、社会で補う」の割合が45.9%、「社会に見てもらう」「主に社会に見てもらい、家族で補う」が41.4%となっている。

性別で見ると、女性では「社会に見てもらう」「主に社会に見てもらい、家族で補う」の割合の方が、「家族に見てもらう」「主に家族に見てもらい、社会で補う」より高くなっているが、男性では反対に「家族に見てもらう」「主に家族に見てもらい、社会で補う」の方が高くなっている。

前回調査と比較すると、「社会に見てもらう」「主に社会に見てもらい、家族で補う」の割合が増加しており、介護保険制度などを利用して社会で見てもらいたい人が増えている。

問11 家族に見てもらう場合は誰に頼みたいのか…P61参照

- ・ 夫、妻に見てもらいたい人が約69%、男性の方が特にその傾向は強い。

家族に見てもらう場合は誰に頼みたいのかについては、「夫、妻又はパートナー」の割合が68.7%で最も高く、次いで「娘」の17.3%となっている。

性別で見ると、「夫、妻又はパートナー」の割合が女性で54.4%、男性で84.8%、「娘」については女性で26.6%、男性で6.9%となっている。

前回調査と比較すると、「夫、妻又はパートナー」の割合が増加し、「娘」が減少している。

□ 仕事と生活の調和について

問12 生活の中における優先度について…P64参照

① 現実

- ・ 現実では、女性は「家庭生活」を、男性は「仕事」を優先している。

生活の中において何を優先するのか、現実にもっとも近いものは、「仕事を優先」の割合が25.6%、次いで「家庭生活を優先」が24.0%、「仕事と家庭生活をともに優先」が15.3%と続いている。

性別で見ると、女性では「家庭生活を優先」、男性では「仕事を優先」の割合が最も高くなっている。

性×年代別で見ると、「仕事を優先」が、働き盛りの男性の40歳代で67.3%と突出している。

国と比較すると、「仕事を優先」の割合はほぼ同じで、「家庭生活を優先」「仕事と家庭生活をともに優先」は、小樽市の方が低くなっている。

② 希望

- ・ 男女とも「家庭生活を優先」と「仕事と家庭生活をともに優先」の割合が高い。

生活の中において何を優先するのか、希望に最も近いものは、「家庭生活を優先」の割合が21.7%、次いで「仕事と家庭生活をともに優先」が21.2%となっている。

性別で見ると、男女とも「家庭生活を優先」「仕事と家庭生活をともに優先」の割合が高くなっている。

国と比較すると、「家庭生活を優先」「仕事と家庭生活をともに優先」の割合は小樽市の方が低くなっているが、「家庭生活と地域・個人の生活をともに優先」は小樽市の方が高くなっている。

- * 現実では、女性は「家庭生活を優先」、男性は「仕事を優先」の割合が最も高いのに対して、希望では、男女とも「家庭生活を優先」「仕事と家庭生活をともに優先」が高くなっている。現実と希望のギャップは男性の方が大きくなっている。

問13 地域活動等への参加時における支障について（複数回答）…P70参照

- ・ 「仕事が忙しい」「活動する仲間や機会がない、少ない」が支障となっている。

地域活動等への参加時における支障については、「仕事が忙しい」の割合が31.3%、次いで「活動する仲間や機会がない、少ない」が26.1%、「情報がない、少ない」が21.9%と続いている。

性別で見ると、男女とも高い割合の順は同じであるが、「仕事が忙しい」「活動する仲間や機会が少ない」「関心がない、したいと思わない」においては、男性の方が女性より高くなっている。

前回調査と比較すると、「仕事が忙しい」「活動する仲間や機会がない、少ない」「情報がない、少ない」の割合が減少し、「関心がない、したいと思わない」が増加している。

問14 男性が家事、子育てなどに参加するために必要なことについて（複数回答）

…P73参照

- ・ 「夫婦などでコミュニケーションを図る」「労働時間短縮などで余暇時間を持てるようにする」が上位を占めた。

男性が家事、子育てなどに参加するために必要なことについては、「夫婦などでコミュニケーションを図る」の割合が38.1%と最も高く、次いで「労働時間短縮などで余暇時間を持てるようにする」が35.7%、「男性自身の抵抗感をなくす」が26.9%と続いている。

性別で見ると、女性では「夫婦などでコミュニケーションを図る」、男性では「労働時間短縮などで余暇時間を持てるようにする」の割合が最も高くなっている。

年代別で見ると、20～50歳代の稼働年代で「労働時間短縮などで余暇時間を持てるようにする」の割合が最も高くなっている。

* 男性の家事等への参加の支障が、仕事を優先せざるを得ない現実にあるとうかがえる。

問15 男性が育児休業や介護休業を取ることに…P76参照

① 育児休業

- ・ 「ほかに子育てをする者がいない場合はやむを得ない」が約46%、「家族として当然である」が約34%と続く。

男性が育児休業を取ることにについては、「ほかに子育てをする者がいない場合は取るともやむを得ない」の割合が46.1%、次いで「家族として当然である」が34.3%となっている。

年代別で見ると、30歳代では「家族として当然である」の割合が最も高くなっており、年代が上がるにつれて低くなっている。

② 介護休業

- ・ 「ほかに介護をする者がいない場合はやむを得ない」が約48%、「家族として当然である」が約38%と続く。

男性が介護休業を取ることにについては、「ほかに介護をする者がいない場合は、取るともやむを得ない」の割合が47.7%、次いで「家族として当然である」が38.4%となっている。

* 介護休業の方が、育児休業よりも「家族として当然である」の割合が高くなっているものの、男性が育児・介護休業を取るのには「家族として当然である」は30%台でまだまだ高くはない。また、平成22年9月の「小樽市労働実態調査」でも男性の取得者はいないことから、事業主に対する育児・介護休業制度や職場環境整備についての啓発が必要となっている。

問16 女性が職業を持つことについて…P80参照

- ・ 1位「職業継続型」約40%、2位「再就職型」約31%となった。

女性が職業を持つことについては、「職業継続型」の割合が39.9%、次いで「再就職型」が31.3%となっている。

性別で見ると、「再就職型」の割合は女性の方が高くなっている。

性×共働き別で見ると、「職業継続型」は共働きをしている男性で最も高く52.2%となっている。

前回調査と比較すると、「職業継続型」の割合が増加し、「結婚退職型」「出産退職型」「再就職型」が減少している。

北海道、国と比較すると、「職業継続型」の割合は、小樽市の方が北海道より高く、国より低くなっている。

- * 「職業継続型」の割合は前回より増加し、特に共働きをしている男性では「職業継続型」に対する理解者が多くなっている。

問17 女性の職場進出のための条件整備について（複数回答）…P84参照

- ・ 「保育・介護の施設やサービスの拡充」「育児・介護休暇制度の普及、充実」が上位を占めた。

女性の職場進出のための条件整備については、「保育・介護の施設やサービスの拡充」の割合が48.4%、次いで「育児・介護休暇制度の普及、充実」が37.8%、「労働条件面で男女差をなくす」が21.7%と続いている。

年代別で見ると、20～30歳代では「育児・介護休暇制度の普及、充実」、40歳以上では「保育・介護の施設やサービスの拡充」の割合が最も高くなっている。

□ 男女の人権について

問18 ドメスティック・バイオレンス（以下「DV」と言う）、セクシュアル・ハラスメント（以下「セクハラ」と言う）について（複数回答）…P87参照

① DV

- ・ 被害経験は全体で約4%、女性対男性の比率は3対1となった。

DVについては、「身近に被害を受けた人はいない」の割合が47.6%で約半数となっており、「自分が直接被害を受けたことがある」が4.4%となっている。

性別で見ると、「自分が直接被害を受けたことがある」の割合が女性6.3%、男性2.3%となっている。女性対男性の比率は3対1で、国の調査でも同様の結果となっている。

② セクハラ

- ・ 被害経験は全体で約5%、女性対男性の比率は9対1となった。

セクハラについては、「身近に被害を受けた人はいない」の割合が46.7%で約半数となっており、「自分が直接被害を受けたことがある」が5.2%となっている。

性別で見ると、「自分が直接被害を受けたことがある」の割合が女性9.0%、男性1.0%で、被害者の多くは女性となっている。

問19 DV等の暴力をなくすためにどうしたらよいか（複数回答）…P91参照

- ・ 1位「犯罪の取締りの強化」、2位「法律や制度の制定や見直し」となった。

DV等の暴力をなくすためにどうしたらよいかについては、「犯罪の取締りの強化」「法律や制度の制定や見直し」「被害者のための相談所の整備」「捜査や裁判で女性担当者を増やす」の割合が上位を占め40%を超えている。

性別で見ると、女性では「捜査や裁判で女性担当者を増やす」を最も望んでいるのに対し、男性では「法律や制度の制定や見直し」を最も望んでいる。

前回調査と比較すると、今回の上位4項目の順位は入れ替わったが、傾向は変わっていない。

- * DV等の被害者は、誰にも相談できず我慢している人が多いと言われており、潜在化しているケースがあると予想されることから、DV等防止の啓発と相談窓口の周知を図るとともに関係機関相互の緊密な連携が必要となっている。

□ 男女平等参画社会の形成について

問20 男女の地位の平等感について…P94参照

- ・ 男女が平等であるのは「学校教育」のみ、「職場」「政治」「社会通念や慣習」では男性優遇の割合が特に高い。

「家庭生活」など7分野における男女の地位の平等感については、「男性の方が優遇」（「男性が非常に優遇されている」「どちらかといえば男性が優遇されている」）の割合が「地域活動」「学校教育」を除く5分野で最も高くなっている。特に「職場」「政治」「社会通念や慣習」の3分野では、「男性の方が優遇」が50%を超えており、日常生活においてはまだまだ男性が優遇されている結果となっている。その一方、最も平等と感じられているのは「学校教育」で、「平等である」が46.9%となっている。

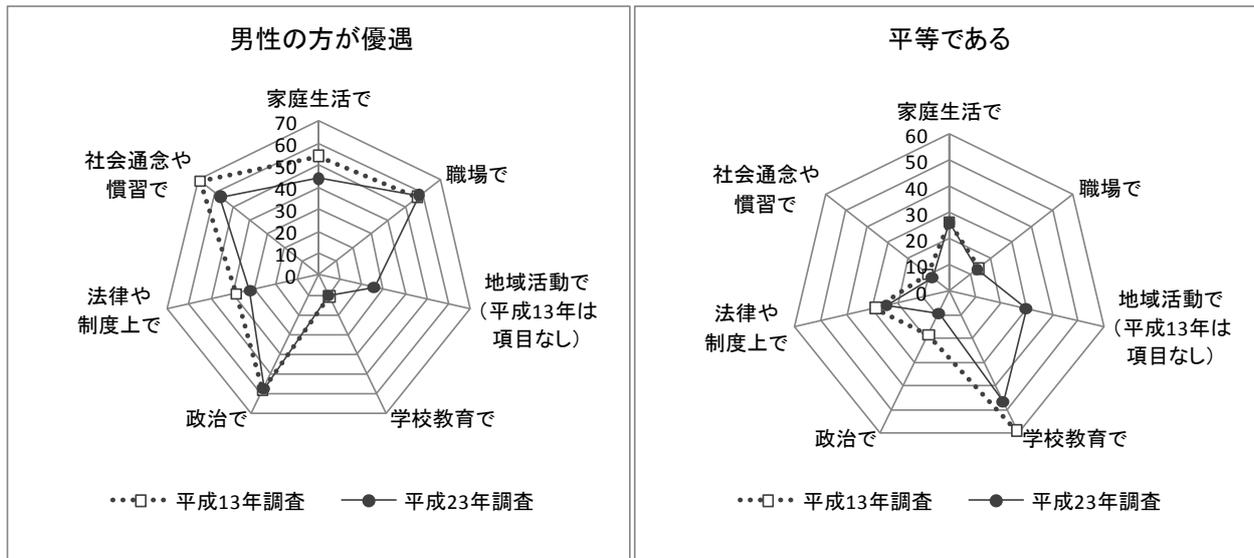
性別で見ると、「男性の方が優遇」の割合は、全ての分野で女性が男性を上回っており、男女の意識の違いが見られる。

前回調査と比較すると、「男性の方が優遇」の割合が「家庭生活」「法律や制度上」「社会通念や慣習」で減少し男性優遇が改善されている。その一方で「学校教育」「政治」では「平等である」が減少している。

北海道、国と比較すると、ほとんどの分野で「男性の方が優遇」の割合は小樽市の方が低くなっている。その一方で「平等である」も小樽市の方が低くなっている。

- * あらゆる分野で男女が平等に参画するためには、社会通念や慣習の背景にある固定的性別役割分担意識の解消や家庭における家事、育児、介護など身近なところからの意識改革をこれからも進めていくことが必要となっている。

単位 (%)



問21 学校教育における男女平等のあり方について (複数回答) …P116参照

- ・ 「進路や生活指導で、男女の区別なく興味や能力を尊重」が60%を超えている。

学校教育の場における男女平等のあり方については、「進路や生活指導で、男女の区別なく興味や能力を尊重」の割合が63.6%と最も高く、次いで「男女平等の意識を育てる授業を行う」が32.4%、「教師の男女平等の意識を高める研修を行う」が31.3%と続いている。

- * 性別、年代別に関わらず、「進路や生活指導で、男女の区別なく興味や能力を尊重」の割合が最も高く、「学校教育の中で行う必要はない」が全体で3.3%となっている。国の第3次男女共同参画基本計画の重点施策に新たに設けられたとおり、子どもの頃からの男女平等参画についての理解を促進していくことが求められている。

問22 政治や行政での女性意見の反映について…P119参照

- ・ 女性は「反映されていない」、男性は「反映されている」と感じている。

政治や行政での女性意見の反映については、「余り反映されていない」「ほとんど反映されていない」の割合が41.9%で、「十分反映されている」「ある程度反映されている」の38.0%を上回っている。

性別で見ると、「余り反映されていない」「ほとんど反映されていない」の割合は、女性の方が高く、「十分反映されている」「ある程度反映されている」は、男性の方が高くなっており、男女で感じ方が大きく違っている。

前回調査と比較すると、前は「十分反映されている」「ある程度反映されている」と「余り反映されていない」「ほとんど反映されていない」は、ほぼ同じ割合であったが、今回は「余り反映されていない」「ほとんど反映されていない」の方が3.9ポイント上回っている。

問23 政策等決定の場で女性が少ない理由について（複数回答）…P122参照

- ・「家事などで女性の負担が大きい」、「男性優位の組織運営が根強い」が上位を占めた。

政策等決定の場で女性が少ない理由については、「家事、子育て、介護など女性の負担が大きい」の割合が50.8%と最も高く、次いで「男性優位の組織運営が根強い」が44.4%、「性別役割分担などの社会通念がある」が23.2%と続いている。

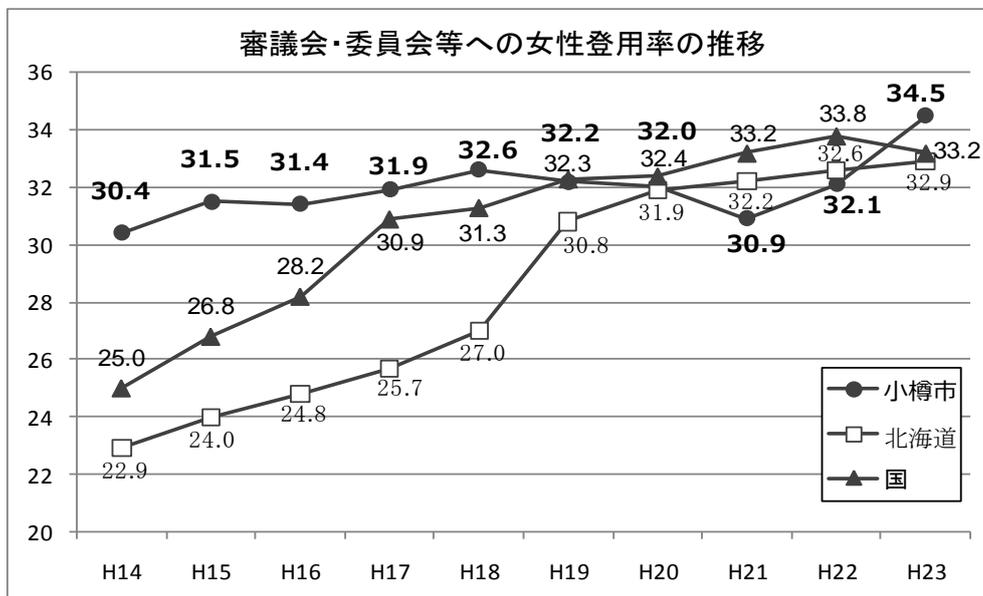
性別で見ると、女性では「家事、子育て、介護など女性の負担が大きい」の割合が最も高くなっている。男性では「男性優位の組織運営が根強い」「家事、子育て、介護など女性の負担が大きい」がほぼ同じとなっている。

前回調査と比較すると、「家事、子育て、介護など女性の負担が大きい」の割合が増加している。

- * 小樽市では市政運営への女性の参画を促進するため、現計画に市が設置する審議会・委員会等への女性委員の登用目標値を「平成24年までに40%」と設定しているが、平成23年4月では34.5%で10年前に比べ4.1ポイント増加しているものの、女性の参画はいまだ十分とは言えない現状にある。

政策等決定の場に女性が参画し、その意見が反映されるためには、女性の進出を拒む要因である「家事、子育て、介護など女性の負担が大きい」「男性優位の組織運営が根強い」などについて改善を図り、女性が参画できやすい体制を作っていくことが求められている。

単位（％）



問24 男女平等参画社会の実現のため社会をどう変えるか（複数回答）…P125参照

- ・ 「仕事と家庭が両立する社会構造に改める」の割合が51.1%と最も高い。

男女平等参画社会の実現のため社会をどう変えるかについては、「仕事と家庭が両立する社会構造に改める」の割合が51.1%と最も高く、次いで「社会通念や習慣、しきたりを改める」が40.0%、「託児や保育などのサービスの充実を図る」が39.0%と続いている。

前回調査と比較すると、「仕事と家庭が両立する社会構造に改める」「託児や保育などのサービスの充実を図る」の割合が増加し、「法律や制度で平等でないものを改める」「社会通念や習慣、しきたりを改める」が減少している。

問25 男女平等参画を進めるために市に望むこと（複数回答）…P128参照

- ・ 「安心して高齢期を迎えられる環境整備」「子育てや保育サービスの充実」が上位を占めた。

男女平等参画を進めるために市に望むことについては、「安心して高齢期を迎えられる環境の整備」の割合が63.4%と最も高く、次いで「子育てや保育サービスの充実」が45.9%、「企業への男女平等の考え方の啓発」が29.9%と続いている。

性別で見ると、男女とも「安心して高齢期を迎えられる環境の整備」の割合が最も高く、特に女性で高くなっている。また、「子育てや保育サービスの充実」は女性の方が高く、「企業への男女平等の考え方の啓発」は男性の方が高くなっている。

- * 小樽市の高齢化を反映し、「安心して高齢期を迎えられる環境の整備」は全ての年代で多くの人が望んでいる。また、「子育てや保育サービスの充実」は30歳代の子育て世代で、「企業への男女平等の考え方の啓発」は全ての年代の人が望んでいる。

□ 全体を通して

前回調査と比較し今回の結果を見ると、「男女の地位の平等感について」は、「家庭生活」「法律や制度上」「社会通念や慣習」で男性優遇が減少しているものの、「学校教育」「政治」で平等と感じる人の割合は減少しており、一進一退の状況となっている。

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という固定的性別役割分担意識については、同感しない方の割合は増加し、固定的性別役割分担意識は10年間で少しずつ薄れてきている。

「家庭内の家事分担について」は、依然として「妻が中心」の割合が高い中で、ほとんどの項目で「妻が中心」の割合は減少し、特に「買い物」「家族の介護」では男性の参加が増加しており、少しずつ平等参画が進んでいる。

「女性が職業を持つこと」については、「職業継続型」の割合は増加し、特に共働きをしている男性は「職業継続型」に対する理解者が多くなっている。

「自分の世話を誰に見てもらいたいのか」については、介護保険制度などを利用して社会で見てもらいたい人が前回よりも増加している。また、小樽市の高齢化を反映し、「安心して高齢期を迎えられる環境を整備」は全ての年代で多くの人が望んでいる。

今回の調査では、「生活の中における優先度について」は、現実では、女性は「家庭生活を優先」、男性は「仕事を優先」の割合が高いのに対して、希望では、男女ともに「家庭生活を優先」「仕事と家庭生活をともに優先」が高くなっている。現実と希望にギャップがあり、特に男性の方が大きくなっている。男性が家事、子育て、介護、地域活動に参加するためには、夫婦などでコミュニケーションをよく図りながら、互いに役割を担っていくことが必要と考えている人が多くなっている。